『九桂草堂隨筆』を讀む

文學博士　内田銀藏

大正六年に出た新しい書物、又は雜誌掲載の論文には注意すべきものが種々あるが、古い書物で從來寫本でのみ傳はつて居つたものが新に版になつたのも彼是ありまして、その中には又色々面白いものがあります。その古い書物で本年（大正六年）初めて印刷に附せられたものゝ中で、私の多大なる興味を以て讀みましたものゝ一は『九桂草堂隨筆』であります、これは豊後の日田の人で大阪に住し、殊に詩を以て名のあつた、幕末の學者廣瀨旭莊の隨筆であります。從來寫本で傳はつて居りましたが、本年の八月『百家隨筆』の第一冊に收められまして、國書刊行會から出版になりました。この書物はさう廣く從來流布しては居ませんでしたが、しかし版になります前に寫本で御讀みになつた方もありませう。或は又未だ本書を讀まれずとも、今より約十年前に、即ち明治四十一年の初頃、西村天囚先生が「龜門の二廣」と題する長い續き物を大阪朝日新聞紙上に連載せられ、即ち龜井の門下の廣瀨淡窓及廣瀨旭莊の二人のことを詳に傳せられまして、その「龜門の二廣」の中に、餘程多くこの『九桂草堂隨筆』を利用せられましたから、それにより已に本書の内容、本書の記事の或るものを御承知の方もありませう。而して去んぬる八月にこれがかやうに版になりまして後は、

それを寓目せられ、それを熟讀玩味せられた方も段々あると思ひます。しかし如何なる書物でも、讀む人により注意する所が必ずしも同一ではありませぬ。殊にこの隨筆の如き頗る種々雜多のことの書いてあるものでは、讀者の學問や、經歷や、嗜好の異るに從ひ、其の面白いと思ひて注意する所は、一人々々違ふでせう。全く違はぬまでも多少は違ふ。また同一の條に注意しても、それに對する感想が必ずしも同じではありますまい。私は此の隨筆は本年讀んだ書物の中最も面白く思つたものゝ一でありますから、今日茲に自分の面白いと思つた條の二三に就いて、聊か述べてみたい。

それを述べまする前に、この隨筆の出來た次第を簡單に述べませう。この隨筆は主として安政二年西暦千八百五十五年に出來まして、少しばかりはその後安政三年及四年に至り追加しましたものであります。旭莊は文化四年西暦千八百七年の生

れでありますから、安政二年は數へ年で四十九歳になります。それで書中にも明年は知命なり云々と云ふ語もありまして（卷九、一八二頁）、即ち四十九歳の時重もに書いたのであります。書いた場所はどこかと云ふと、大阪の伏見町であります。この頃旭莊は大阪の伏見町に居て、その居た家の庭に桂が九本あつたさうで、それ故に居を九桂草堂と云ひ、この隨筆を『九桂草堂隨筆』と名づけたのである。そのことは本書の開卷第一の處に明記してあります。始めから自分で筆を執つて書いたかと云ふとさうではありませぬ。長三洲即ち長光太郎に筆錄さしたのであつて、そのことも本書の首に門人長光太郎筆錄とあるので明である。

その書き初めた精密の日時は本書だけでは詳でない。本書の始に「安政乙卯夏秋の交ひ、伯兄の門人長光太郎、我浪華の僑居に來り學ぶ、其業を觀るに、余が敢て當る所にあらず、唯夙興を勸る

が爲めに、毎夕予と同く起きしめ、天明まで予が語を筆記せしむ、凡百餘日、十卷を得たり、九桂草堂隨筆と名く」とありまして、先づ夏の季、秋の初頃に書き初め百餘日かゝつて大體出來たことが分る。それから本書中には、或は「今日乙卯十月初九日客春亞墨利加船に乘じて下田に來りし清客羅森が日本日記を見るに」云々と記し（卷六、一一二頁）或は「去年秋晩、伯州の橋井氏にて將に發せんとして雨ふりければ、秋高風送雁、天暮雨留人と云一聯を賦せり、今夕乙卯九月二十五日賈島が逸詩に、長江風送客、孤館雨留人の句あるを見出したり、實に暗合なり、唯對の疎密淺深は必ず後人の公論あらん」（卷九、一八三―一八四頁）とあるので、九月に書いた條もあり、十月になつて記した條もあることが察せられる。しかし書き初めが幾日かはこれではわかりませぬ、然るに旭莊には別に『日間瑣事備忘錄』と云ふ大部の日記があります。この日記の卷百九安政二年乙卯六月十一日の條を見ると長光太郎日田より至ると云ふことが書いてあります。次に卷百十同年七月二十六日の條を見れば、初めに講後令光太郎始講詩經とあつて、それから段々讀んで行くと、

今朝謂光太郎曰、明日以往吾以寅牌起吾子、吾子須筆錄我言也、曰諾、夢中光太郎既至、一人在余傍、問先生開卷第一述何事乎、余曰方思而未復、（下略）

と云ふ文があります。即ち明日から以後寅の刻に御前を起すから私の言ふことを筆記せよと光太郎に話し、その筆錄のことが心にかゝつて居たとみゐて、夢の中に光太郎が來た、又そこに外に一人居て先生は開卷第一に何事を述べられますかと尋ねたといふことである。尚ほ其の續きには夢中の問答を錄し、それから「言畢覺街鼓方報寅牌、乃起光太郎、燈下筆錄漫筆數則、而語夢、」云々とあります。故に書き初めは七月二十七日の早朝と思、

ひます。

日記の七月二十八日の條には、寅牌起光太郎口授漫筆如例、以後休則書とあるから、是れより通例毎早朝に口授して光太郎に書かせたものと思はれます。次に桂のことに就いては、やはり日記即ち『日間瑣事備忘錄』の中に對照すべき記事があるそれは卷百十安政二年八月二十七日の條で、そこには庭有桂數樹、盡發香氣、薰蒸大發頭痛、余舊愛桂香、至是覺其害人、蓋太近太殷、則物皆爾といふ文がある。

先づ是れでこの隨筆の出來ました年月のこと、その出來た場所のこと、如何にして起草されたかと云ふことは一通り述べましたが、要するに旭莊が大阪で五十になる前の年に思ひ立つて、口授し筆錄させたものだといふことは、此の書を讀むものゝ先づ念頭に存し置くべきことであると思ふ。さてこの『九桂草堂隨筆』は假名交りの文で書いてある、之に反し日記は漢文である。日記は浩瀚であるが、隨筆は比較的紙數が少い。日記は事實を細かに書いてある故に、旭莊の日常生活を調べ、また當時の學界のことを知るには參考となるが、それには議論や意見は少い。隨筆にはこれに反して主として議論意見感想を述べて居る。これは本書を讀み『日間瑣事備忘錄』と對照すれば能くわかりますが、旭莊自らも『九桂草堂隨筆』の初にそのことを言つて居ます。

さてそれでは『九桂草堂隨筆』の中で、主として如何なる所に興味を感じたかといふに、私の特に注意しましたのは、その中の卷九の自叙傳的の部分であります。その部分には旭莊自らの經歷、彼の思想性行等に關する僞らざる告白　飾らざる叙述があつて、趣味多く教訓になることも少くありませんが、それと共に彼の父祖、彼の兄淡窓に關することが、彼是書いてあります。それらが殊に

私の興味を惹いたのであります。私は色々の點から廣瀨淡窓に對しては特別の興味を有つて居ます唯從來有つて居ますのみで未だ詳細に淡窓のことを調べる機會を得ぬのを遺憾に思つて居ますが、兎に角淡窓に關しては特別の興味を有つて居ます私の最初この書に興味を感じたのは、それが淡窓の弟の隨筆で、淡窓研究に資すべきものがあると思つたからであつて、旭莊其人に就いては從來あまり知らず、又それ程興味がありませんでした。しかしこの書を讀むと其の中の淡窓に關する記事に興味を有つと共に、旭莊其人の人物思想性行にも頗る興味を有つやうになつたのである。

本書の自叙傳的部分を見ると、先づ第一に廣瀨家が長生の家系であつたといふことが能く分ります旭莊の父、それから祖父、それから段々溯つて曾祖父・高祖父・太祖父まで五代の間皆八十歳以上生きました、それで二百四五十年で唯五世であると云ふことであります。旭莊の叔母に當る人には九十二で死んだ人あり、彼の叔父は八十六で死んだ彼の父は寶曆元年に生れ天保五年まで存生で八十四歳で歿したのであります。次に私の注意を惹いたのは、旭莊が其の父の晩年に出來た子であることであります。彼は父が五十七の時の子であります、彼の母は旭莊を生んだ時に年四十三であつた德川時代の有名な人には父の晩年の子であつたものが他にもある。新井白石の如きも其の生れた時に父は五十七歳、母は四十二歳であつた。

其の次に私の注意した事は、旭莊の祖父も父も共に立派な人であつたことであります。祖父は土地の人に畏敬せられ、又人を救ひ、陰德を施したことが多い。父も誠に誠實な人であつたやうである。本書中に見えた蜜柑の話の如き、また彼が旭莊に對し、汝兄弟才氣は我に十倍せり、唯我拙誠にしかずと云ひ、又汝輩書を讀み、字を識り、種

々の病名を諳んじ、種々無量の病を工夫し出す、我は何も知らず、八十を過ぎたり云々と語りて笑ひたりといふが如き、以て其人を想ふべきである。旭莊は曰く「近年余が兄弟世に知らるゝことを得るも、悉く王考と淨喜公との餘慶ならざるはなし」と。淨喜公は即ち旭莊の父である。

淡窓と旭莊とは、兄弟ではあるが、性格の夫々違つて居たことは人の能く知る所である。それに就いては本書中に面白い話があります。その一は已に西村天囚氏も記されたものであるが、大略次の如くである。旭莊の子孝即ち林外が大阪に居る旭莊に手紙を出して、德は何れの處から始むべきかと問ひましたら、旭莊はそれに答へ、俗に云ふ遠慮の二字より始まると申し、養生を問ひしに對しては、寡食の二字より始まると答へた。孝は淡窓の養子となつたのであるが、彼れまた日田に住する淡窓に同じことを尋ねた所が、淡窓の答に、德は無遠慮の三字より始まる、養生は多く食するより始まるとあつたから、孝は大に當惑したとのことである。そのことを後に或る大名が聞いて曰く、二人の兄弟の學は皆實學である、淡窓は遠慮深い人で、人の問ひしことも十に三四答へて、餘は答へず、故に往々遠慮したことを悔いたであらう、又體質も弱く、食少なく、それ故に其の子に敎ふる所皆己れの覆轍を踏まざらしめんとしたのである、旭莊は敢て言て遠慮せざる人なるが故に往々無遠慮を悔いたであらう、又豪膽の人で常に大食を以て病を招ぐと見ゐる、故に其言此の如し是みな實に深く子を愛するの誠心より出でたる言なり、我曾て淡窓に下に臨むことを問ひしに、淡窓は韓非の術を以て下を御するの策を勸めた、又旭莊に問へるに旭莊は下に接するは誠を以てするに若くはなし、術を用ふるは至拙なりと答へた、然るに淡窓は誠實の人、旭莊は策略の士である、

是れ亦前の子に教ふる如く、各々自ら顧ることありて云へるのであらうと。これによりましても二人の考へ方が違ひ、性格が異つて居たことがわかります。又これによるも人の傳記を調ぶる時又は性格を調ぶる時、或人がかく言つたとて、その人がそのやうな性格の人だとは直ちに斷言出來ぬ。屢々人は自分の短所缺點を深く感じ、それよりして己れの爲さんと欲してよくせざることを專ら他人に勸むることがある故に、それをその人の本領特色とすると大に誤ることがある。これは一般に傳記を調ぶるに當りて注意すべきことの一であります。

又一つ面白い話がある。或人が旭莊に向ひ、あなたのせられたことで、淡窓先生は必ずせずと思召さるることがあるかと尋ねたら、旭莊は左の如く答へた。

「我せしこと家兄必ずせざること勿論數へ盡しがたし、我一身の中にても壯年の時せしこと、今は決してせざることあり我三十の年堺に開業せり、門生十五六人集り居たり、一日皆申しけるは、某の町風呂屋の主人は惡物なり、風呂熱に堪へざれども少しも水を加ゆることを許さず、既に帶をときたる上は錢は皆取りて返さずと云ふ、我、然らば今日は皆我に從ひて來れと云、風呂屋に行き、一同に衣を解きて湯に就しに至て熱し、水を加よと云ふに、其家の僮十五六歳なるもの、大なる杓を以て水を二杯入れたり、最早此にてよしと云ふ、我、此は熱して入るべからず、歸るべしとて皆衣を着け、湯に入らずして歸る故、湯錢は持歸るべしと云ふ、其家の妻、其は出來ぬ事なり、我家にて衣を解かれし上は、入らざるはをまへさまの損なりと云ふ、併し入られざるものを入れと云ふは無理なりと詰りければ、隨分入らるゝなりと云ふ、我、然らば先此家の僮を入るべしと云ふて、從者に命じて其僮の衣を褫ひ、手足をとりて湯に投じければ、僮大に呼びて死すると呼ぶ、我其妻に、僮は熱にて死すると呼ぶ、他人は是に堪ゆるとおもへるや、其方も僮に繼て入べしと云ふ、妻地に平伏して泣て罪を謝す、其主人何くよりか出來りて眞に死罪なり何卒御赦しくだされとて百拜す、然らば赦すべしと、僮を上げしに泣て已まず、翌日門生彼の湯には行まじと云ふ、余が

曰く、宜く往くべし、彼も毎日十五人分の湯錢を失ふては、昨日僮を苦しめられし其償ひなきなり、我に從ひて來るべしと云ふて湯屋に到り、昨日のことを忘れずば、速に湯をうめよと云ふ、主人自ら水を加へて、大に我をもてなしたり、後漸く懇意になり、先生は畏るべき人なりと云ふ、此事我ら今は決してせざることなり、家兄は少年の時も必ずなきことなり」

これによつても旭莊の豪邁で濶達なこと、淡窓のおとなしく、扣目の人であつたことがわかります。しかしこれにも今ならばせぬと言つて居るから、旭莊でも五十に近い頃は三十前後とは樣子が多少違つたことゝ思ふ。人の傳記を調ぶるに、或年齡の時のことを、他の年齡の時にまで直ちに推し及ぼすことの危險なことは、是れでもわかります。

旭莊は先づ詩で世に知られ、人によつては單に詩人とのみ思ふかも知れませんが、彼は同時に「實學」に志した人である。それは今申した或大名の言中にもあるが、この『九桂草堂隨筆』を見ると

彼は左の如く云つて居る。

「萬卷の書をよみても、只一場の說話となして過れば、讀まざると齊し、我心をとめて人の情と事の理とを考ゆる時は、赤本。淨瑠璃本にても、多少の益は得べし、譬へば兩替所にゆき、十萬兩の金を見るよりは、道に遺たる十錢を拾ひ得る方我物になりたるが如し、」

また、

「書を讀むは猶物を食が如し、如何なる美肴珍羞にても、腹に入たる後永く消化せざれば、必ず病を生ず、古の聖經賢傳と雖も、解し得たるの後は、是を渾化して日用に使ふべきなり渾化すること能はずして、永く胸膈に滯たるは、所謂書より讀まれたるなり、」

蓋し彼の期したる所は、單に字を識り、文を誦するに止まらず、書を讀めば、之を玩味し、之を消化し、更に之を各自日常の經驗に合せ考へて、思索考究の功を積み、此の如くにして人の性情を知り事物の理を悟らんとしたものであらう。

彼は經世の志あり學問を以て實務に資せんとし歷史の研究には頗る興味を有して居た。支那史で

は割合に新しい時代、即ち明、清の歴史に力を用ひ、また西洋のことをも取調べ、世界の形勢を察せんと心懸けた、是れは時勢の影響を受けたものである。史學に關する旭莊の意見で、私の興味を惹いたのは、本書卷三(六二一—六三頁)に見ねて居る正史及間史の說である。旭莊の考では、正史には政治經濟のことを書くべし、それに對して別に間史を設け儒者文士の事蹟、即ち學問文藝に關する事を書くべしといふのであります。即ち彼は政治經濟の歴史と學藝の歴史との二方面を認めたのである。彼は又曰く「天下も一家も財盡れば亡ぶること同じ理なり」と(卷四、八五—八六頁)。彼は國の興亡は主として財政經濟上の原因に基くとし、「今に及んで總て府庫の充ると、乏きとに因りて、興滅すると云ふことを悟れり」と申して居る。(同上)

旭莊は歴史地理の研究にも興味を有つて居つた彼は其の鄕里の地誌を作る志があつた(卷七、一三四頁)。彼はそれ故に玖珠郡舊事記といふ古記に注意を拂ひ、其の大要を本書中に錄して居る(卷七、一三三頁以下)。鄕里日田の風土に就いては、旭莊は「我鄕日田などは四面皆山、夏の比にも濃霧雲の如くにして、午前までも曳くことあり」と申して居る(卷七、一三〇頁)。

道路と土地の開拓との關係に就いて、本書中に左の記事のあることは、恐らく人文地理學者の興味を感ずることであらう。

「余が友に天下を遍歴せしものあり、其說に西國は道路迂曲にして、田畝を避る處多し、常陸より北、或西の諸國は、田畝狹隘にして道路を避る處多し、因て考るに、西國は土地早く闢け、處々に酋長あり、王室始めて其地に道を通ぜしとき、其成色あるに因るなり、東北は人少く地廣し、首に路を作りて其地を闢きしならん、今世の道路は定て三百年來のことゝ察すれども、蓋古に仍りて修むるならんと云へり、余案するに、此說當れり」云々(卷七、一三〇—一三一頁)

旭莊の友なる人の指摘した東北地方と西國との相違は、如何なる程度のものであるか、私の未だ知悉せざる所であるが、併し是れは兎に角面白い着眼である。

人口增加の率と風土との關係も旭莊の注意に上つた。之に就いて彼の說く所は左の如くである。

「天草など、一揆の時は人口四萬、今は十五六萬もあるよし總て海邊漁村は人口大に增し、山中高寒の地はあまり增さず其理必ずあることなるべし、吾未だ知らず、或人の說に、山中は寒し、寒き地は疝起り易し、疝氣の人は生產に艱なり、海邊は暖なり、且漁人からだを運動すること多く、疝積少し故に兒を產し易しと、不審し、余思ふに、今は山中を去て海邊に赴く人氣なり、人の好む處は天必ず此に從ふ、故に人の多く出づる方に多く出だし、少く出る方に少く出すの理もあるならん、」（卷七、一三一頁）。

旭莊は三十にして家を出で、堺に住し、翌年江戸に游び、其の年鄕に返り、三十二にして大阪に住した、（本書卷九、一七六頁）。故に堺、大阪の事情には頗る能く通じ、港灣の盛衰にも意を留めたのである。彼れ曰く、

「堺の地、濱は繁昌すれども、町は殊の外荒無す、大坂も上町天滿は安治川木津川の方には如かず、又舊は堺盛んなれども舟路次第に便を失ひ、大坂盛んになりたり、大坂の西口は堺よりは遙に西にありたるを以てなり、今は大坂海口狹くなり兵庫の方年々盛んになりたり、兵庫は大坂よりも西なるを以てなり、次第次第に西に張る勢ひになるは、摂・泉の地形西に海を受け、萬貨西より至るを以てなり、」（卷四、八八頁）。

堺が次第に舟路の便を失ひ、大阪盛になり、大阪も海口狹くなり、兵庫の方年々盛になれるよしをいひ、摂津、和泉の地形西に海を受け萬貨西より至ることを注意せるが如き、頗る要領を得たる說き方であります。

旭莊が三都を比較して各々の特徵を擧げ、京の人、大阪の人、江戸の人、それ〳〵特別の氣風あり、京の人は土地を尊び、大阪の人は富を尊び、江戸の人は官爵を貴ぶといへるなど、讀み來つて

頗る面白く感ずることである、（卷七、一四〇頁）彼は周圍の境遇、及時代の氣分が人物の上に於ける影響をも說いて居る。曰く「都會の風は何事も束縛して、規矩にかなはしむる樣にする故、天性を失ふて偉大蕃殖するもの少なし、畢竟は功を急にするによるなり、……名を成す者に至りては、田舍人の多きに如かず、……」と。又曰く「木を接ぐに始てなりし實は至て大にして、後は年々に細小になるなり、草創の時は人才多く、次第に少くなるも此理に同じ」と、（卷七、一三九―一四〇頁）。是等も頗る味ふべきものがあるやう覺ゆ。

以上は大正六年十二月一日京都帝國大學學生集會場に於て開かれた讀史會大會にての講演の筆記を修訂增補したものである。「百家隨筆」には「九桂草堂隨筆」十卷の內卷一より九に至る九卷を收め、第十卷を逸し、其例言に「もと十卷ありし由なるも、今は唯九卷のみ存せり」と記してあるが、私は讀史會大會で講演をした後に大阪府立圖書館長今井貫一君の厚意によつて、第十卷の寫本を見ることが出來た。第十卷には旭莊が好んで高山に登つたこと、秋元秀藏が水野忠邦文恭公の墓後改革を斷行すべきこと、また其の改革の失敗に終るべきを豫言したること、大阪の巨商は當主よりも家を重しとする風あること、旭莊が交游せる人物のこと等を記してある。又本卷には旭莊の鄕里より大阪に出でし甲乙丙丁四人に關する實事譚を細かに叙してあるが、恰も小說を讀む想あり、人情輕薄險詐にして表裏多く、少しも氣を許すことの出來ぬ場合もあることを能く寫して居る。

私が『日間瑣事備忘錄』を閲し、之を利用することを得たのも、今井貫一君と武內義雄君との好意に由ることである。茲に其のことを記して兩君の厚情を深謝する。

（大正七年五月二十四日記）